

# 庄野潤三と富士正晴（二）——未発表の富士宛庄野書簡70通をめぐって

SHONO Junzo and FUJI Masaharu (2) : The Newfound Letters of SHONO Junzo

鷺 只雄

Tadao SAGI

はじめに

本稿は「庄野潤三と富士正晴（二）」（平成23年3月刊予定の『都留文科大文学部国文学科創立五十周年記念論文集』）に続く第二稿であり、本稿における翻刻と考察によって、本稿は完結する。猶、考察の対象とした庄野書簡70通は茨木市立富士正晴記念館所蔵のものであり、翻刻に御高配いただいた同館に謝意を申上げる。

〈注〉

- ① 書簡の日付は消印ではなく、自記の日付がある場合はそれによった。従って富士記念館の日付と異なる場合には「↓」を付して、「自記」の日付、もしくは正しい日付を記載した。
- ② 表記は新字、新仮名とした。
- ③ 庄野は富士の「富」を「富」と混用しているが、「富」に統一

した。

- ④ 記載の順序は次の通り。自記の（無ければ消印）日付／消印（判読できない時は不能）／葉書か封書の別。封書の場合、用紙の説明と枚数 筆記用具 自記の日付／発信人住所氏名／受信人住所氏名

二

(41) 昭和26年1月2日

26・1・2 / 葉書 毛筆 年賀状 / Saroyan / 高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

賀正 1951

（中央下段にブランコに乗る庄野の姿あり、Saroyanのサイン）

(42) 昭和26年1月6日↓昭和26年1月5日  
26・1・5／葉書 ペン／大阪帝塚山 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

奮起一番せよとのお言葉、大変有難く、拝見いたしました。転職のことは、御忠告に従い、輕輕しくは致さぬつもりです。伊東先生からも、止した方がいい(変わる事が)と云われました。(今、二日の夜十時、隣家に客の会するありて、越後名物数数あれどアカシチヂミにユキノハダ：と俚謡をうたいいづる声、壁ごしに聞え、酒の気切れたる余輩をして甚だしく羨望の念を起さしむ) 鷗外の「浜江抽斎」をよみ、うなずくところあり。何ぞ読むことの遅かりし。「虹と鎖」の次は、何を書こうかと自分でもたのしみです。「浜江抽斎」の夫人五百は実に躍如としていますね。僕もあんな、しっかりしたものを書きたい。

○樋口書店のおやじは、居留守の名人にて、僕もふんがいらしていません。1500円でごまかすとは非道な商人。御□志かけてすみませんでした。

(43) 昭和26年1月31日↓昭和26年1月30日  
26・1・30／葉書 ペン／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

V I K I N Gのことを、朝、寢床の中で考えていたら、起きて来ると、僕のところへ一冊送ってくれていたの、大変、うれしく、なつかしく手に取りました。お礼を申し上げます。

鷗外の短篇には面白いものがありますね。しかし、僕は、現代の浜江抽斎が書いてみたい。その主人公を探索しています。「虹と鎖」を早く、活字で、大兄に喜んで頂きたいと思えます。もう春が近いですね。

(44) 昭和26年2月26日↓昭和26年2月24日  
26・2・24／葉書 ペン／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

V I K I N G 27号、ありがたく拝受いたしました。「わが名はアラム」が再版の由、知りませんでした。コンテキキ号は、僕も前に何かの雑誌でその梗概を知り、よみたく思っていました。

鷗外の「栗山大膳」「細木香以」など面白いですね。「虹と鎖」の続きを書く準備をしています。春休みに入ったら書くつもりです。大分永い間―半年も書かないので、腕が鳴ります。では又。

(45) 昭和26年3月24日↓昭和26年3月23日  
26・3・23 / 大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

只今、V I K I N G 28号到着、有難く拝見しました。後記及び書評中に、貴兄身辺のトラブルについて書かれてあるのを見て、数日前に新聞に貴兄父君のことが出ていたと人から聞いて、その新聞を私は見なかったの、心に案じていたところでしたから、やっぱり何か厄介なことが実際に起こったのだと分りました。病院内部で貴

兄の父君をめぐつての暗闘・中傷があつたのでしようか？ 一日も早く解決されて、阿武山房に平和が訪れんことを願つて居ります。

「コンテイキ号漂流記」は、前号紹介を見て、小生も一冊購つて、一気に読了し、大へん感動しました。全くハイエルダールとその仲間、エリックやヘルマンやクヌートなどには惚れ込みました。凡百の小説をよむより、この一冊の方がどれだけ僕たちに勇気を与えてくれるか知れません。出発のところなど、全く呆れ果てるではありませんか。「おうむ」を連れて乗り込むなんて、イキですね。あの男らしいユーモアは、われら爪のあかをせんじて飲むべきです。写真版が大へん有難いですね。一度、遊びに来られませんか。

(46) 昭和26年5月1日↓昭和26年4月29日

26・5・1／葉書 ペン 四月二十九日／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

ヴァイキング、有難く拝受いたしました。小生は、やっと、数日前から作品に取りかかりました。「虹と鎖」以来、八月月ぶりです。今度は、一人の少女の半生の伝記です。僕は、「小公女」に匹敵する作品を生きているうちに必ず書きたいのですが、今度のは、やはり前の「虹と鎖」の系列のものです。夏までかかつて、ゆっくり書いてゆくつもりです。

お礼まで、近況お知らせ。

(47) 昭和26年5月14日↓昭和26年5月12日

26・5・12／葉書 ペン／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

①（注―葉書の裏面）群像六月号の御作を店頭で発見し、早速拝読しました。先ずこの力作を書き上げられた大兄に対して最大の敬意を表します。しつこく畳みこんでゆく手法、ねばっこく、重量感のある文体は、おそらく他に比肩する者は稀であろうと存じます。夕日のガラガラする海へ飛び込む場面が、いくらかフオークナー的にはめこまれてあるのも効果的であるようにみえました。そして書かれてあることの陰惨なわりに読後の感じが少しも陰惨でなくて、むしろ清潔なものを感じました。

不満を申せば、彷徨する主人公の感想・感覚にくっきりした個性が乏しく（散漫な感じ）、佐々木と云う人間もはつきりせず、従つて小説の魅力である②（注―表の下段へ）人間の個性のからみ合いの面白さが、弱いではありませんか。僕には、「日本負けて損したよ、おまんこ損した」と云う女の一句の具体的な強さが、この一篇のもっとも印象的なものであつたとも考えられるのです。つまり、これは、やはり富士さんのポエジイであつて、そこにこの作品のよさと同時に弱さもあるのではないかと思ひました。

注

\*1 富士正晴「敗走」（昭26・6「群像」）芥川賞の候補となる。

\*2 原文は「損」と表記するが、「損」の誤記と考え、改めた。

(48) 昭和26年5月26日↓昭和26年5月25日

26・5・25／葉書 ペン／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／高槻市阿武山日赤公社 富士正晴様

一月ばかり前から母が心臓が弱って寝たり起きたりして、ひと頃は庭へ出ることも出来るくらいになっていたのが、十日ほど前から急に悪くなり、慢性の腎臓炎も併発して、看護婦が夜通し付添いと云う風になりました。

ここ三年来、兄と父とつづいて失った僕は、またここで母を失うことになるのは痛手で、困っています。僕もこの数日、身体の具合が悪くて、今日は学校を休んでしまいました。悪しき時です。

折角のヴァイキングの会が近くであるのに、こんな具合では、お目にかかっても愉快にお話し出来ないかと思えます。皆さまによろしく。

(49) 昭和26年9月11日

(郵便局の消印なく、「毎日新聞社」の社名入り封筒(大阪中央局区内堂島上二丁目三六番地)の表には「図書室 富士正晴様」、裏には「9月11日 庄野潤三」と鉛筆で書かれている。本文も同様に白紙に鉛筆)。

富士兄

れいのアフリカ童話、一回、十四枚にして、六回連続に出来ますか？ 朗読してもらいたいです。それで一つの話を十四枚に伸ばすのは無理ですか？ 「お伽のおばさん」の時間です。今週中に

スプリクトがほしいのですが。

○稿料は一枚五〇〇円見当と考えて下さい。支払いは台本が刷り上がった時という約束をしました。

○電話番号が間違っていたらしいです。(23) 6834です。御連絡下さい。

(50) 昭和27年1月3日↓昭和27年1月1日

27・1・3／葉書 毛筆 一月一日 年賀状／庄野潤三／大阪府三島郡安威村天王 富士正晴様

賀状をありがとうございます。大変多忙な年末でありました。一月一日 庄野潤三。御健筆をいのる。

(51) 昭和28年1月5日

28・1・5／葉書 ペン／大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六 庄野潤三／大阪府三島郡安威村天王 富士正晴様

賀状ありがとうございます。

昨年は短いものを一つしか書いていないので(発表したのは「紫陽花」と「虹と鎖」と二つですが)今年は昨年夏以来引っかけた作を是非書き上げたいものです。「真空地帯」を正月の休暇に読み終わったところで、「現在」(I)の大兄の批評をよみ、同感したり、感心したり、話したいという気持ちになっています。久坂が死んだので、驚きました。

(52) 昭和28年10月4日↓昭和28年10月2日

28・10・2／葉書 ペン 十月二日／東京都中央区銀座西六丁目三番地 朝日放送株式会社東京支社 庄野潤三／大阪府高槻市外（阿武郡）安威村 富士正晴様

先月二十三日に上京、今日から出社しました。新居にもようやく馴れ、家族四人元気ですから御安心下さい。出発前にゆつくりお話する間がなく、失礼しました。

駅から二十分という不便なところで、女房は苦勞しますが、（井戸、石油コンロ使用）、まわりがひつひつして、森や林にかこまれ、子供にも小生にも甚だ健康的でよろこんでいます。御挨拶まで。

(53) 昭和30年1月8日↓昭和30年1月7日

30・1・8／葉書 ペン 年賀状 一月七日／庄野潤三／大阪府三島郡安威村天王 富士正晴様

賀 春

大阪で正月を過し、昨夜帰京しました。賀状を有難うございました。

一月七日

庄野潤三

(54) 昭和31年4月30日↓昭和31年4月28日

31・4・28／葉書 ペン／東京都練馬区南田中町五三 庄野潤三  
／茨木市安威天王 富士正晴様

お葉書有難く拝見いたしました。母の病気で三月末から三回東海道を往復しましたが、到頭亡りました。仰言る通り、天寿を全うしたと私たちも思つて居ります。

群像の書評御覧下さった由、読書新聞に吉行淳之介が書くように云つて居りましたが。こちらでは一般に評判がいいということも聞きました。大阪読売の文芸時評は大阪へ帰りました時に兄が取つていて見せてくれました。有難く拝見しました。昨日ヴァイキング近号を拝受しました。

(55) 昭和40年6月5日↓昭和40年6月3日

40・6・3／葉書 ペン 六月三日／川崎市生田九〇八八 庄野潤三／茨木市安威天王 富士正晴様

御無沙汰しています。お元氣で過しのことと存じます。新潮社から昨日、小高根二郎氏の「詩人、その生涯と運命」が届いたのを見ますと、富士さん宛に署名したものでした。それで私宛のものがそちらへ間違つて送られているかどうかと考えています。何しろ大部の、重い本なので、近くだとちよつと持つて行くということも容易なのですが、どうしようか。取敢ずこの葉書を書いてお尋ねすることにします。今年によく雨がふるせいか、家のまわりの草がよく生えます。実に繁茂します。一人で抜いています。お宅の竹やぶは如何ですか。

(56) 昭和40年6月16日↓昭和40年6月13日

40・6・14／葉書 ペン 六月十三日／川崎市生田九〇八八 庄野

潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

お葉書有難うございました。私もひよつとしたらと心配していたことが、その通りになってしまい、こうなるといった、仰言るように全員に他人宛のが来ているという方が徹底していて、みんなをアキラメの気持ちにさせて、いいかも知れませぬ。よいやさのよいやさ、ですわね。

先日、名瀬から島尾が図書館の用事で上京して、久しぶりに話をしました。彼はむしろ若くなつたくらいで、私は老ける一方です。老けても別にどうということはありませんが、あご鬚を抜くと必ず白毛があつて、どうかすると白毛だけということもあります。では又、失礼しました。

(57) 昭和43年4月6日↓昭和43年4月5日

43・4・6／新宮御船祭と速玉大社の神宝館の絵葉書 ペン 四月五日夕／川崎市三田五ノ九〇八八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

お葉書拝見しました。ごらんのように、はかないことを書き綴つて、暮らして居ります。帝塚山にいたころ、富士さんの膝にだっこしてもらつた長女が、学校を終わつて、この間から会社勤めを始めました。と云つても、子供っぽいことには変わりはありませんが。いつか夜ふけのすし屋でテレビに富士さんが写り、それは11PM という番組でしたが、なつかしく存じました。 四月五日夕

(58) 昭和45年9月30日↓昭和45年9月27日

不能／封書 ペン コクヨ便箋5枚 九月二十七日／川崎市三田五ノ九〇八八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

今日はお詫びの手紙です。

先日、思潮社から刷り物が来て、富士さんの編集で「伊東静雄研究」という本を出す、その中に前に私が書いた文をいくつか収録したということで、内容の予定も同封されてありました。

この刷り物は、同じ形式でこれまでにもほかの同種類の本を出版している様子で、編者の名前と「——研究」の——のところだけ空白になっています。そだけ、富士さんのお名前及び伊東静雄という文字がペンで記入されているという(以上①)わけです。それが、最初にちよつと気になりました。

たまたまシリーズ的にこういう詩人の批評・回想を一つに集めた本を刊行していて、その一冊として企画されたのなら、便宜上、こういう依頼の方法を取るのもやむを得ないと思うのですが、正直に云つて、とつばなから何か員数を揃えるという気味が感じられて、あまり好ましい印象を受けなかつたのです。

どうか私の申上げることが片寄つていて、窮屈である、偏狭であるというので、お怒りにならないで下さい。伊東先生の本であり、富士(以上②)さんの編集なら、何も文句いわずに黙つて承諾の返事を出せばいいのではないかと、自分に対して何度も言い聞かせたのですが、三、四日考えて、林さんに電話でこのことについて林さんの気持ちを伺つた上で(林さんは承諾の返事を出されたあとでした)、私は収録を見合せたいという返事を出しました。

近くにおいて、お目にかかれれば、かりに私が富士さんの怒りをまともにも受けるとしても、気は楽です。手紙はこまごまと書かなくてはいけないし、詳しく書けば書くほど、結果はまざくなりそうで、しかし、何も書かないよりはいい(以上③)と思って、書くことにしました。

本当は、だれかひとりの著者、富士さんや林富士馬氏のような方の、みっちり時間をかけて綴られたメモワールが出ればいちはばいいと思います。そういう方が、やっぱり文学ではないかという気がします。(これは富士さんもきつと賛成して下さると思います)ひとつの時代の記録としてこういう形式の本も、それはそれで必ず価値のあるものと考えますが。

富士さんのお考えが十分に、隅隅まで行き(以上④)わたっていないような気がします。こういう本を出すとすると、結局、誰かが何もかも引つかぶることになり、そうでないと陽の目を見ないのでしょうか。

私自身の書いたものにも、読み返せばひとりよがりの、恥しいところがいっぱいあるのではないかと怖れます。どうか我儘勝手な申し分をお許し下さい。叱られても仕方がないと思っています。

九月二十七日

庄野潤三

富士正晴様(以上⑤)

(59) 昭和45年10月6日↓昭和45年10月3日

45・10・4/葉書 ペン 十月三日/川崎市三田五ノ九〇八八 庄

野潤三/茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

只今お葉書頂きました。

富士さんのお考えが分りましたので、(私がひとり呑みこみの早合点をしていました)前言を取消し、拙文載せて頂くことに同意いたします。お手数をかけましたことをお詫びします。思潮社へはこれと一緒にその旨、返事を出します。

(60) 昭和47年6月5日↓昭和47年6月2日

47・6・2/葉書 ペン 六月二日/川崎市三田五ノ九〇八八 庄  
野潤三/茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

「苛烈な夢」を頂き、有難うございます。林さんと富士さんと、お二人とも全く違ったふうに書かれていながら、読後の印象はぴったり一つに重なるのに心打たれました。御礼申し上げます。

これまで気付かなかったことをはっきりとよく分るように書いてくれて、これも嬉しく思いました。伊東静雄について望ましい理解がこの書物で得られることになり、ほっとしました。

(61) 昭和47年6月12日↓昭和47年6月9日

47・6・10/山口市常栄寺の雪舟庭の絵葉書 ペン 六月九日/川崎市(生田)三田五ノ九〇八八 庄野潤三/茨木市安威二〇〇二  
富士正晴様

うっかり七円の葉書を出して、申し訳ありません。お詫びします。帝塚山の家で富士さんの膝の上のせてもらった長女は(写真が残っています)、去年の夏に男の子が生れ、つまり私はじいさん

になりました。一方、学校へ行っている男の子がまだ二人いますので、父親と祖父と二役をしていて、それがおかしいことがあります。皆様お元気で。

(62) 昭和50年5月30日↓昭和50年5月28日

50・5・28／上海の天下第二泉の絵葉書 ペン／川崎市多摩区三田  
519088 庄野潤三／茨木市安威2002 富士正晴様

中国旅行から帰って、「富士正晴詩集」を手に取りました。この大きさは好ましいものに思われます。その表紙の手ざわりも。いきなり「酔余放漫の」という詩が目飛び込み、懐かしく、しみじみとした心持になりました。作中の幼女は、いま、四歳と三歳の二児の母となりました。厚く御礼申し上げます。

三月下旬にはじめて諫早の伊東静雄のお墓に参りました。家内と生田の庭の花を携えて。

(63) 昭和50年6月30日↓昭和50年6月27日

50・6・27／葉書 ペン 六月二十七日／川崎市多摩区三田五ノ九  
〇八八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

この前、頂いた詩集の中で、「一九四六年の詩」という一篇は、いいものですね。中国を旅行して来て、その疲れも取れたいま、はじめに読んだときよりもなおすがしく、貴く思われます。「わたしの老父母」という言葉が、また「孝養をつくし得よう」というのが、心に残ります。美しい作品です。「酔余放漫の」方は、春夫

の一家団欒の詩を思わせるところもあります。小生は、はかなき文字を綴って、暮して居ります。この秋には、長女に三人目の赤ん坊が生れる予定です。

(64) 昭和51年7月30日↓昭和51年7月26日

51・7・26／葉書 ペン 七月二十六日／川崎市多摩区三田五ノ九  
〇八八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

「俳句」の「虚子雑感」、大変面白く、かつ、しみじみと拝読しました。亡き父上の俳句については初耳で、そこへ母上の妹の御主人である方、更にまた伊東静雄とからまって、小説を読むような、濃い味わいがありました。いく分、物悲しいところもあり、これから先がどう展開するにせよ、この一回分だけで小生は頗る満足しました。それにしても虚子に手紙を書いてみてよかったですね。「柿二つ」は三好達治も好きだったようです。

(65) 昭和51年8月10日↓昭和51年8月6日

51・8・6／葉書 ペン 八月六日／川崎市多摩区三田五ノ九〇八  
八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

永代供養の、いい句集をおつくりになり、何ひとつそういうことをしていない私は少々肩身が狭い思い、というより羨ましい気持ちがありました。「続大歩危」、有難く拝受いたしました。この「あとがき」は簡潔で、心のこもった、篤実な文章で、感心しました。私の亡父母も徳島県人、父は、父上と同じ徳島師範の卒業（徳島中学が



ら途中転校)です。大歩危小歩危は、海軍入隊の年(十八歳夏)に友人と剣山から池田を経て高知へ向うみちすがら、そばを通った思い出があります。あの大歩危が父上の故郷とはこれも存じませんでした。悠々として、しかも長年の修練を読む者に分らせてくれる、いい句にいつばい出会います。なかなかこうはゆかないものでしょう。

早乙女というも若きは一人のみ 憲郎

(66) 昭和51年9月13日↓昭和51年9月12日

51・9・13/葉書 ペン 九月十二日/川崎市多摩区三田五ノ九〇八八 庄野潤三/茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

「海」の書評、お忙しい中からお書き下さり、有難うございます。厚く御礼申し上げます。あのアコーディオンはまだあります。毀れて音の出ないところが一つか二つあり、さすがに誰もひきません。「ボタントリボン」の快い旋律を久しぶりに懐しく思い出しました。「文芸」の目次で「長沖二」という文字を見出し、よろこびました。東京文壇で誰ひとりとしてこの人のことを語る者は無かった(それも無理からぬことながら)からです。長沖さんには、兄と二人、何度も南の吉田バアへ誘ってもらいました。短篇小説が好きないようにでした。はじめて「群像」に小説が出た時、手紙をくれて、これだけ悪口をいえば、時評で叩かれても応えないでしょうと優しいことをいつてくれました。冥福を祈ります。「旅」の連載にも出ていて、これもうれしく再見。

長男はホテルに勤め、給仕をしています。サッカーのチームを

作り、キャプテン。次男も小さな大学でサッカーをしています。これも主将。運動神経をほめてくれたので報告まで。

(67) 昭和54年7月26日↓昭和54年7月21日

54・7・23/葉書 ペン 七月二十一日/川崎市多摩区三田五ノ九〇八八 庄野潤三/茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

「極楽人ノート」を有難く拝受しました。口絵の写真はなつかしく、シャツがズボンの上に半分かぶさっているところも煙草を指に持っているところも結構です。

いくつか続けて拝読しましたが、「貝塚さんはどんな人」は傑作で、市電の中でお金を貰うところは圧巻でした。扇子を落したのに、拾ってくれた人から受取らず、電車が動いてから気が附くところ、しみじみとあわれでした。こんなに京都の学者の人たちから大切にされるのは、もとより人徳であるに違いありません。「五に對しては五、十に對しては十を」的人間にはそんな仕合せはありません。ただし、自分でも窮屈で面白味のない男であるという自覚はあり、これは一生変わらないでしょう。奥さんは如何ですか。この間、林富士馬から聞きました。どうかお大切に。

「酔っぱらい読本」というのに詩が出ていて、三十年前を思い出しました。ただ老いゆくのみ。当り前のことですが。バッテン・ポウ!

(68) 昭和55年3月15日↓昭和55年3月12日

55・□・□/葉書 ペン 三月十二日/川崎市多摩区三田五ノ九〇

八八 庄野潤三／茨木市安威二〇〇二 富士正晴様

御新著「不参加ぐらし」を有難く拝受しました。あちこち気儘に読んでいますが、「かわせみ」は散文詩のようです。三十年近く、ふくろうの声を近くに聞くと（ふくろう一）家内に話したら、三十年も展げないところは珍しいですねと申しました。なるほどその通りで、羨ましい気持がした。この生田は、最初の一年くらい近くの村で鳴いたのですが、それきりです。夜空を旋回する番のふくろうなんてますます羨ましい。「ふくろう二」のお嬢さんの勇氣には敬服。

「一休断片」に出て来る中国人苦力の投身自殺、それを描いた詩に感心しました。谷川の水車のほとりの中国兵に「無常よりも、美しい平安」を感じたというところにも。「御苦勞蜂」も面白い。以上、ゴタゴタと（まだほかにありますが）御礼にかえて。「銀座百点」の随筆もいろいろ□□分って面白く、お嬢さんのカットの画はよく似ています。

(69) 昭和55年8月25日↓昭和55年8月21日

55・8・21／葉書 ペン 八月二十一日／川崎市多摩区三田五ノ九  
〇八八 庄野潤三／茨木市安威二一八―四 富士正晴様

「駄馬横光号」を有難く拝受しました。

「幡籠山新春」の、糞すくいを持つ農夫との会話ならびにその表情を楽しみました。「ひとこま」の、鶏をつかまえて木に登らされた少年が行方知れずなるところは、不思議な緊張を覚えました。

そのあとの、通りかかった別の少年の額に落ちた冷たいものにはびっくり仰天しました。大変な経験をされたものといま更ながら驚きます。（小生のは、内地だけで、みずばらしいものです）まだその二編を拝読しただけですが、取急ぎ御礼申し上げます。御自愛を祈ります。庭に朝顔一輪。

吉川幸次郎の「忘れぬうちに皆記録しておくがいい」という言葉は小生も感心しました。

(70) 昭和56年9月13日↓昭和56年9月11日

56・9・11／葉書 ペン 九月十一日／川崎市多摩区三田五ノ九〇  
八八 庄野潤三／茨木市安威二一八―四 富士正晴様

「楽しい日日」という随筆を興味深く拝読しました。寢床の上に坐って泣いて居られる父上に、小学五、六年の男の子の姿を重ね合せ、不憫におもうところが美しく、また御人徳により五百人を越える人がお葬式に見えたことを喜ばしく存じました。

父に孝養をする間もなく、死なれた小生には、悔いることのみ多く、大兄の文章に感慨を抱きました。奥様お大切に。先日、バイキングの古い号で武庫川病院で野球の試合をした時のが出て来て、なつかしかったです。

三

まず1〜70の書簡について簡単な注を施すことから稿を始めることにしたい。

庄野氏の書簡は昭和21年6月から同56年9月まで70通が収蔵され

ているが、そのうちの大半、54通までは昭和31年4月までのものという时期的な偏りがここにはあるようであるが、そのことは言い換えれば氏が作家として出発するスタートの時期に当たっていたわけである。作家誕生にまつわるさまざまな悩み、秘密、事情をうかがう上では非常に興味のある時期の書簡と言つてよいであろう。

最初に庄野氏の略歴を簡単に記すと、氏は大正10年2月9日大阪市に生まれ、父は帝塚山学院の院長。住吉中学、大阪外語(英語)を経て、九州大学法文学部東洋史専攻卒業。昭和18年12月軍隊に入り、海軍少尉で復員。昭和20年9月今宮中学(旧制)の教員(歴史)となり、23年4月市立南高校に転じ(英語)、26年9月朝日放送に入社し、ラジオの教養番組制作を担当。10月、父急逝。28年9月、朝日放送東京支社に転勤、一家をあげて上京、東京練馬の新築の家に住む。30年1月、「プールサイド小景」(昭29・12「群像」)により第32回芥川賞を、小島信夫とともに受賞。同年8月に朝日放送を退社し、作家生活に入る。32年9月から一年間、ロックフェラー財団の招きでアメリカに留学することになり、人口は六百人、地獄にはのつていない、オハイオ州ガンビアのケニオン大学で客員研究員として、夫人とともに一年間暮らした。その間、二人の子供たちは、留守宅に夫人の母が来て、世話をみてくれた。36年4月、川崎市生田に転居し、終の棲家となる。

一往の略歴はこの程度にとどめて、あとはその都度必要に応じて補うこととした。

1の書簡は富士正晴記念館の『富士正晴資料目録Ⅳ』(平7・3・30)では「S21・11・?」として庄野書簡の四番目に分類されているのを一番目にもつてきたのは、①これを「S21・6・11」と

読んだこと、②書簡の冒頭二行は復員した喜びをのべたものとするのが最もふさわしく、その後の「光耀」刊の報告もこれに合致するであろうと思われたからである。「鶴岡」の住所は林富士馬の疎開先である。

1の書簡以後に富士の住所が「日赤」云云とあるのは、両親はもともと小学校教員であったが、昭和に入ってからそれはをやめ、父は大阪の日本赤十字病院の事務に転職したからである。

2の「立野夫人」は未詳。富士は昭和19年3月に入隊して、中国の華中・華南を行軍し、桂林まで行く。機関銃中隊の上等兵であった。21年上海から復員し、5月22日帰宅した。富士には18年9月に結婚した妻内田や江子(妹安子の友人)があったが、復員してみると、妻の実家の願い(富士の生死不明につき)から富士の両親と話し合い、離婚していた。「林氏」はのち小児科医となる詩人・評論家の林富士馬(大3〜平13)であろう。東京池袋に住んでいた。

「個展」とあるが、画と版画は富士の生涯の趣味で、復員後は家にこもり、せっせと彫っていたことは知られており、21年10月末〜11月、京都の出版社秋田屋の画廊で第一回の「富士正晴版画展覧会」を開いたのは知られているが、この個展については未詳。

3の「結婚以来」云々は、庄野氏が仲人魔とでもいうべき父の手にかかってたった一回会っただけで四歳下の同じ小学校の卒業生生千寿子と結婚したのは21年1月のことで、妻は医師の娘で評判の美人であった。結婚後書いたものとしては確かに掌編小説の「罪」(昭21・7「午前」)一篇のみである。

「雪・ほたる」(昭19・3「まほろば」3巻1号)は庄野の最初の創作であり、しかも師事して数年、師匠の伊東静雄からはじめて

ほめられた作品で、内容は九大時代の下宿を中心にして親しく行き来していた島尾敏雄が海軍予備学生を志願して入隊のために慌しく福岡を去るまでの日々を書きとめたものだが、ここにその後の庄野の方向がはつきり見据えられた観があり、そこに伊東静雄の洞察力の凄さがあることは確かであろう。

「光耀」は全三冊刊行された同人雑誌で、誌名は伊東静雄の命名。メンバーは庄野潤三（一号の編集発行人。昭21年5月刊）・林富士馬（同二号の編集人。発行人は庄野と記載。昭21年10月刊）・島尾敏雄（同三号の編集発行人。昭22年8月刊）の三名と三島由紀夫・大垣国司の五名。庄野「貴志君の話」、島尾「孤島夢」などにはすでに後年の作風が見られる。

「進駐軍の検閲」とは、昭和二十年八月の敗戦前はマス・メディアと郵便等のパーソナル・メディアに対する警察・内務省等の検閲があり、発禁・不許可・押取等があった。敗戦後は警察・内務省による検閲はなくなった代わりに、昭和20年9月1日から、24年10月末まで、占領軍GHQの民間検閲局CCDは活動を開始し、新聞・出版・放送・映画・演劇から紙芝居にいたるマス・メディアと、郵便・電話・電信などのパーソナル・メディアに対する検閲が実施された。郵便では特に左翼系の団体、人物に対して厳しく、封書の場合には下部を開封して内容を検閲し、検閲済印を押ししたゼロハンテープで再封印してから配達。

「林」は林富士馬、「貴志君」は日本医大の学生貴志武彦。「伊東先生」は詩人の伊東静雄（明39〜昭28）のこと。長崎県生、京大国文科卒。生涯旧制中学（戦後は新制高校）の教師を勤めた。リルケ・ヘルダーリンに関心を寄せる一方、古今集にも心ひかれた。第一詩

集「わがひとに与ふる哀歌」（昭10）は萩原朔太郎から「真の本質的な抒情詩人」と称賛されながらも、一方で閉塞した時代状況の中で屈折せざるを得ない青春の詩情を「歪められた島崎藤村」とも評されたように、孤高反俗の詩風が顕著であり、文芸汎論賞を受賞。

第二詩集『夏花』（昭15）以後は一転して観照的傾向が強まって散文的となり、第三詩集『春のいそぎ』（昭18）に至って、一層進み、難解さは消えて平明となり叙景的傾向も見えはじめる。第四詩集『反響』（昭22）では更に進んで日常の生に根をおろした、散文的で平明で、敬虔な、叡智の高みに達した詩を愛していたに相違ない。

そして旧制住吉中学時代に教え子であったのが庄野氏であり、師事するに至るのが昭和十六年三月のことで伊東の詩風が大きく転換しつつあった後期のことである。

その特徴は簡潔に言えば日常性・散文性・観照性・平明ということになり、この点で師弟はピタリ一致することに驚かざるを得ないであろう。

4の「小生のは小品風のもの」は「貴志君の話」をさす。

5の「今中が甲子園へ出た」というのは昭和21年8月に復員した庄野氏は父の知合いの今宮中学（旧制）の校長と面接して即決で9月30日付で歴史の教師として採用となり、22年春には春の甲子園選抜大会に今中が出場、一回戦で桐生中学に敗れたことをさす。その時、庄野氏は野球部長であった。

「初恋」（昭22・2・9「毎日新聞（大阪版）日曜コント欄」）はコント。「午前の御作」は22年2月号の「伊東静雄」をさすか？

6の「エッセイ」は「サロイアンのこと」（昭24・9・25「VI-

KING 10号)と思われる。

7の「詩稿同封」の詩は「今村二郎の話」(昭25・1・1「VI-KING 13号」)。

8の「赤チャン」はこの一週間あとに誕生する富士夫妻の長女子(命名は中国文学者吉川幸次郎)。

10の「斎田昭吉」は原文が「斉木昭吉」と誤記されているので改めた。彼は伊東静雄の教え子で、詩人志望の青年。

11の「れいの群像の小説が、二月号にのることに」というのは出世となった「舞踏」(昭25・2「群像」)をさす。「前田の「夏草」は前田純敬「夏草」(昭24・12「群像」)をさし、この作品はこの期の芥川賞を井上靖「闘牛」と争った作者の代表作。

12の「群像」も右に同じ。「ヴァイキング原稿」は何をさすかは不明。

13の「昨日送ったヴァイキング原稿」も同前。

14の「帰って来て」は12の末尾に書かれているように、三日に上京して、七日朝に帰阪したことをさす。「東京読売のとく名時評」は白井明(鷺注―林房雄の別名)「小説短評」(昭25・2・7「読売新聞夕刊」2面「メモラビリア」欄)。

15の「小ヴィヨン」は昭和24年7月～25年4月まで「VI-KING」(8～16号)に発表の「昭和二十二年の小ヴィヨン」(のち「小ヴィヨン」の十章までの六回連載)をさす。「横光賞の有力候補」とあるが、横光利一賞は横光利一の業績を記念して、昭和23年に改造社に制定されたもので、年一回、優秀な新人の作品に授賞した。第一回(昭24)は大岡昇平「俘虜記」、第二回は永井龍男「朝霧」の二回で終了となり、庄野氏の受賞はなかった。

17の「ストレイチー」というのは、イギリスの伝記作家リットン・ストレイチー(一八八〇～一九三二)のことで、伝記文学という新分野を開拓し、代表作に『ヴィクトリア朝のおえら方』(一九一八)、『エリザベスとエセックス』(一九二八)などがある。

18の帝塚山会館はもと大正末頃、帝塚山在住の人達が親睦の集会用に建てたもの。太平洋戦争末期に強制疎開で解体。戦後は学院が再建し、分教室として使用。「弟」は四男ですぐ下の弟、至氏のこと。「スラブの子守唄」は「群像」(昭25・8)に発表。

19の「岸本君」は同人の岸本通夫(大学教師)。「れいの山羊の小説」は「スラブの子守唄」をさす。

21の「純敬」は前田純敬。アルマン「ホワイト・タワー」は、22の書簡に記すところによれば無名の新人小説家の模様。

23の「船乗亭」は未詳。「貴兄の文章」は「読書の愉しみ」(昭25・4・18「夕刊新大阪」)。

24は封書で封筒表に「原稿在中」とあるが、中味は残されていない。

25の「少女と浅利氏との間に新しい恋が燃え上る」というのは「分別」(昭25・6・1「VI-KING 18号」)をさす。「新制中学ではいけないのでしょうかね?」云々とあるのは、当時富士には定職がなく、妻子をかかえて求職中であつたからで、庄野の父の力を借りて新制高校の教諭にとねらつて履歴書をよこしたものだ。彼の場合、旧制三高を四年連続一年に原級留置ののち退学という学歴がひっかかって資格の点で難ありとされて高校では採用されなかった。

26の「手ぐすね引いて待望」は未詳。「スラブの子守唄」は「群

像」の「七月号」に掲載決定というのは「八月号」の誤り。「ペスト」(一九四五)はアルベール・カミュ(一九一三―六〇)の代表作の一つで、戦争反対や同士の連帯・犠牲的精神が強調されている。

27の「檻」は前田純敬の「文学界」(昭25・6)掲載の作品。「ポイス」は未詳。「新大阪、今夜あなたのが出ていました」は富士の次の二つの文章が「夕刊新大阪」に掲載―「桑原武夫『文学入門』」、「反抗と軽蔑の世代」―されていたことをさす。

28の「新大阪岸氏よりの云々」は富士からの紹介で庄野氏が「君が人生の時―人生肯定の作家・サロウヤン」(昭25・7・1「夕刊新大阪」)という原稿を依頼され、それを脱稿して社に届けたという報告。

29の〈文芸部での講演依頼〉の件は、この時期庄野氏は市立南高校に勤めていて英語を教えていたが、講演は30の書簡にあるようにことわられた。

30の「王道」(昭5)はフランスの作家アンドレ・マルロー(一九〇一―)のクメール文化の遺跡を求める冒険を主題にした小説。「船乗亭」は未詳。

31の「主人は冷き土の下に」(仮題)は後に改題して「虹と鎖」(昭27・6「現在」)となる作品。

32の島尾は「れいの河出の長編(中略)をまだ書き上げていない」というのは、『質学生』(昭25・12・20 河出書房)か。

34の「パテナタン」は未詳。

35の「真鍋」は真鍋呉夫(大9―)で小説家。

36の「サロイアン雑記」(「舞踏」2集)は未確認。「マノン・レ

スコオ」はアベ・ブレポーの不朽の恋愛小説だが、これについて書いたか否かは未詳。

37の「兄」は児童文学作家の庄野英二。

38の東京から「帰ったとたんに死にました」は父、貞一(明治22・4・19―昭25・10・9)の急逝を伝えるもの。富士に「庄野潤三論」執筆の意図はあったようだが、結局は構想倒れに終わったようである。

39の庄野氏の例会席上での「同人辞退の発言」というのは、庄野の入会が「VIKING」9号(昭24・8・25)からで、退会は十二月、その理由を氏は「創作活動も批評活動も行わずにただ同人に名を連ねていることは無意味」なので「一人になって、出直したい」と39の書簡では語っている。しかし、この十二月には創刊同人の島尾敏雄をはじめとして、前田純敬、庄野と有力な同人が相次いで脱退する背景には何があったのかについては中尾務氏にそれらを含めて「VIKING」の先史から始めて微に入り細にわたり、資料の悉くを発掘収集網羅してその動向を追跡した詳細な論考(「CABIN」)「舳板」(「VIKING」などに連載)があるので、詳細はそちらを参照していただきたい。「ブランコ・サロイアン」とはサロウヤンのファンである庄野氏は自らを「ブランコに乗るサロウヤン」と自称し、好んでその絵も書いたりしている。「C・O・V」は「Captain of VIKING」のこと、ここでは富士正晴。

40の〈道標〉の書店については未詳。

44の「コンティキ号」はハイエルダールの『コンティキ号探検記(または漂流記)』(一九五〇)〔南米からポリネシアに渡った冒険探検記録〕。

45の〈父君の中傷〉詳しくは後述するように、清廉潔白な富士の父をおとしめようとはかったトラブルのこと。

46の「一人の少女の半生の伝記」は、「紫陽花」(昭27・4「文芸」)。

48の「兄」は長兄鷗一のこと、昭23年11月没、37才。

49の「毎日新聞社」の社名入り封筒の件は昭26年7月25日から28年8月20日まで、富士は学芸部山崎豊子(後の作家)の世話で毎日新聞大阪本社資料部図書室の臨時雇いとなって出勤していたからである。

又、この書簡は内容が示すように、庄野氏は昭26年9月11日民間ラジオ放送開始の朝日放送に入社して、教養番組の制作を担当した。その関係で富士も婦人子供番組の台本を書きはじめ、やがて放送劇や小説脚色なども手がけるようになる。

50の書簡以後、富士の住所が変更になったのには次の事情がある。昭26年3月13日、父憲夫が背任横領容疑で高槻市警に逮捕された。贈物をもらわず、闇米も買わない父が上下から煙たがれ、中傷されたもので、もとより起訴にはいたらず、十五日に帰宅。その後、父は日赤の事務長をやめ、日赤看護学校嘱託となる。そのため、公舎を出ることとなり、家(土地は借地)を買い、昭26年11月3日に、大阪府三島郡安威村二〇〇二番地(現在の、茨木市安威二丁目八番四号)の新居に転居し、これが終の栖となる。

51の「今年は(中略)是非書き上げたい」は未詳。「大兄の批評」は「真空地帯」について(昭27・6「現在」)を、「久坂が死んだ」はYUKING 同人の久坂葉子が昭27年12月31日鉄道自殺をしたことをさす。

52の東京転勤は昭28年9月23日に一家で上京し、かねて土地を買い、新築していた東京都練馬区南田中町四五三の新居に親子四人で住む。のち、昭36年4月4日にもう一度転居するのでついでに記しておく、川崎市生田九〇八八(現在の、川崎市多摩区三田五九〇八八)が終の栖。

54の「母」の死は、昭31年4月。

55の「小高根二郎」は東京生まれの詩人で、『詩人、その生涯と運命』(昭40・5・10 新潮社)は伊東静雄の評伝。

56の「名瀬から島尾が上京」とあるのは、当時島尾敏雄は妻の病気の治療のため、奄美大島の名瀬の図書館に勤めていた。

57の「長女」は夏子(昭22年10月生)といい、そのたぐい稀なユーモアのセンスをふりまいて後年の庄野文学の世界を豊かにいろうどる魅力的な存在。

58の「思潮社の本」は富士正晴編『伊東静雄研究』(昭46・12・1 思潮社)。

60の「苛烈な夢」は、林富士馬・富士正晴著『苛烈な夢―伊東静雄の詩の世界と生涯―』(昭47・4・30 現代教養文庫749 社会思想社)をさす。

62の「中国旅行」は昭50年5月8日から三週間中国人民対外友好協会の招待で、日本作家代表团(団長は井上靖)の一員として中国各地を旅行したことをさす。『富士正晴詩集』(昭50・5・5 五月書房)はこの月刊行。

63の「春夫」は詩人の佐藤春夫で、詩は「一家団欒図」

64の「俳句」の「虚子雑感」はこの後全26回「俳句」に連載する稿の第一回分、昭51年8月号「俳句」をさす。のち、『高浜虚

子」(昭53・10・10 角川書店)として刊行。『柿二つ』(大4・5・10 新橋堂)は子規晩年の苦闘の数年間を活写すると共に、その心理を解剖した虚子の代表作。

65は富士の父憲夫(俳名は憲郎 明22・2・20→昭48・5・21)の供養のために正晴が第二句集『続大歩危』(昭50・5・21)を編んで知友に配ったことへの謝辞をのべたもの。父は生前第一句集『大歩危』(昭33・8)に高浜虚子の序文を得て刊行していた。

66の〈「海」の書評〉は庄野の随筆集『イソップとひよどり』の書評として書かれた『庄野潤三と島尾敏雄』(初出は昭51・10「海」初出原題「音吐朗々たる文章」のち『極楽人ノート』収録時に改題)。△「長沖一」(明37・1・30→昭51・8・5)は小説家・放送作家。東大卒業後、出身地の大阪にもどり、ユーモア作家として活躍した。「はじめて『群像』に小説が出た時」の小説は「舞踏」(昭25・2「群像」)。

67の『極楽人ノート』(昭54・6・25 六興出版)は随筆集。「奥さんは如何」とあるのは、静栄夫人が昭和51年11月から腎臓を悪化させて人工透析に入ったことをさす。

68の『不参加ぐらし』(昭55・2・25 六興出版)も随筆集。〈「銀座百点」の随筆〉とは「時たまの絵かき」(昭55・3「銀座百点」)をさすと思われる。

69の『駄馬横光号』(昭55・7・25 六興出版)は富士の中国への出征体験を素材にした小説集。

70の『楽しい日日』(昭56・9「ZENON」)は「父」についてのエッセイ。

#### 四

#### 「光耀」発行の喜び

1 の書簡は富士の無事帰還、復員を喜ぶことが一つと、もう一つは同人誌「光耀」を発行したことの報告であるが、庄野氏の本音を言えば、後者の方、「光耀」を発行した喜びの報告の方が、率直に言って大きいと言わねばであらう。

その背景には、庄野氏にしてみれば同人はかねて敬愛する友人ではあるものの、はつきり言えばいずれも、それぞれにいくつかの同人誌や雑誌に創作を既に発表した経験を持つキャリアであって、その点ではそれまでに僅か「雪・ほたる」(昭19・3「まほろば」)一作しか発表していない庄野氏との間には歴然とした経路があったわけ、そういう肩身の狭さから脱け出せるチャンスがめぐってきた喜びと同時に、畏敬する友人たちと切磋琢磨出来るうれしさがこの前後の文面には踊っていると見てよいのではなからうか。例えば、次の3の書簡中の次のような表現、「息もつかせぬ劇的な、そしてスエヒロのピステキピステキのような重厚なやつをかきたいな」とか、〈「雪・ほたる」を巻尾に置く短編集―僕の初めての創作集を空想して、仮に「わがハイデルベルヒの町」という名を付け、それに含まれるべき一つの系列の小説を、この五十日近い夏休みに書こうという計画なのです」等が証しているであらう。

2の書簡の内容についてはこれ以上は未詳。庄野氏は生涯を通じて映画はかなり好きだったようで、エッセイにもその事は明らかだが、アメリカ留学を題材にした『ガンビア滞在記』にも映画鑑賞のことはしばしばふれられている。3ではジャン・ギャバン演じる戦



前の名作「ペベル・モコ」を三度見に行ったことをあかしている。なお、3の書簡で庄野氏が雑誌と単行本を出版する際の検閲について富士の質問に答えているのについては、彼が復員後、間がないために戦後の検閲の事情にうとく、庄野氏にたずねたものと思われる。それが直接VIZINGの刊行にかかわるものではないであろう。というのは創刊の時期が一年数カ月もあとのことであるからだ。

### 「貴志君の話」

ところで初めての同人雑誌である「光耀」一輯には注でも記したように庄野氏が編集発行人であるが、氏の作品は掲載されておらず、二輯に初めて「貴志君の話」が載っている。これはどういうことか。いざとなつて怖気づいたのかと言えそうではない。そのこととは二輯の林富士馬の編集後記に明らかで、すでに庄野氏は「七十枚の『青葉の笛』を編集部には届けてあつたが、枚数の都合でやむなくとりやめになった次第が記されているからである。

それから講談社版庄野潤三全集（全10巻 昭48・6、49・4）第一巻には「習作」として「罪」「貴志君の話」「ピューマと黒猫」の三篇が「習作」の代表として収められていることが示すように、庄野氏は4の書簡では「小生のは小品風のものです故、問題ではありませぬ」とか、「貴志君の話」では富士さんを失笑せしめたことであろう。」と殊更に謙遜卑下低評価しているが、それは外交辞令であつて、実態とは別である。というのはそこには氏の後年の作風がまぎれもなく見られるからにほかならない。

この作品は夏休みに暑さと蚊にせめられながら苦勞して、友人の貴志君が復員して山形に疎開中の林富士馬君を訪問した時の話をし

てくれたのを書き上げる話であるが、前半の前置きが長い。

前日友人が来て、多分君とは性格が違うからおもしろくはないかもしれないぬがと言つて話して聞かせたドイツの詩人の小説（リルケの「マルテの手記」であろう）を読み始めるが退屈で読み通せない。眠くなる。すると、今度は暑さと蚊にせめられて眠れない。それで「貴志君の話」という小説を書くことにかじりつくが、一枚も書けない。

何故それに執着するかと言えば、それは一番最近に私の心をとらえた話であるからだ。

友人の貴志君は紀州の人で二月前に復員した軍医、今後郷里の古座で開業するのだが、二晩泊まりで遊びに来て色々話した中に、一番私の心を惹きつけたのが二人の共通の友人である林富士馬の話である。

貴志は復員すると真先に山形の鶴岡に疎開している林を訪ねた。二人は同じ医大に学ぶが貴志は先に卒業して陸軍軍医中尉となり、林は東京に残るが、空襲で焼け出されて鶴岡に行き、家族は宮城県に逃れた。父はそこで医院を開くが、病気で急死。これまで林は父の庇護のもとに気儘に文学の道を歩んで来たが、ここで母と妻子四人の生活の問題に直面する。卒業までにはまだ一年あるが、既に大学には十年いて、一日も早く卒業しなければならぬ。そういう時に貴志が下宿で昼寝中の林を起こしたので幽霊かと思つて悲鳴をあげる。貴志は一週間滞在し、一日林の友人と三人で最上川のほとりに遊んだ。酒に酔つた林は大声で「最上川なんか、まだまだ駄目だ。もつともつと努力しなきゃあ」とどなり、堤の上で友人と競争して草の茂みに転落する。

貴志の話はこれでおしまのだが、「何日も何日も或は五年でも十年でも考えつめるといのがあの独逸の詩人の発想法」であり、それが私には出来ず、林が酔っぱらって最上川の堤を歩きながら大声で言った言葉（もと葛西善藏の岩木山を見ての言葉を真似たものだが）がそれを聞いて以来「不思議に私の胸を離れないのだ」と結ぶ。

つまり、自らの不得手な「五年でも十年でも考えつめ」、「努力を怠らない」姿勢、態度に感銘を受けているわけだが、はっきり言えば最後にテーマが今一つ盛り上がって来ないところに習作たる所以があるであろう。

しかし、作品は日常に材をとり、描写は的確、表現は平明で、後の氏の作風を既に示していることはまぎれもない事実であって、作者が自選全集に収録する所以はそこにあるう。

#### 「居眠り王様」

「光耀」三輯（昭22・8・3）にはもう一つ「居眠り王様」（昭21・11・30 脱稿）が発表されているので一言ふれておきたい。三号は資金不足の為刊行できないのに苛立った島尾敏雄がガリ版刷りで二〇部刊行したもので、「居眠り王様」は八頁分（ノンブルなし）を占めている。

或る晩友人のIが久しぶりに訪ねてきて五人の浮浪児達と友達になった次第を語り、彼等は戦災孤児ではなく、家庭の事情から家とびだしてきたものばかりで、スリ・カッパライ・ジープ荒しで生計を立て、金には困らず、ケンカもせず、4日前の映画館の焼け残った映写室を根城に映画を最大の楽しみにしている。浪人のIが

浮浪児に関心をもった因はクリスチャン社会事業家の「冷やかな人道主義への反感」であり「彼等（注―浮浪児達をさす）に欠けているのは冒険心の満足なのだ」という。

翌日、私は浮浪児の城を見学するべく映写室を見に行くが、三階の映写室とそこへ登る階段だけが爆発で吹きとばされずに突っ立っている危険極まるもの。しかも階段の至る所に糞があり、踏まずに歩くが大変、一寸押されただけで命が危ない所なので、早々に退散。十日位後、友人のKに会い、Iの一連の話をすると、それは全部ウソ。Iは発狂し、みんな作り話だったことが判明するというコント。

コントは意外性が生命だから、それに難癖をつけるのは野暮だが、しかしそれにしても意外性を狙い過ぎてIがなぜそうなったのかについて全くふれていないのは片手落ちだし、毎日会っていた筈のKが全くそれに気付かないのも奇妙な話だ―というわけでこれについての評価は低いと言わざるをえない。4の書簡には「何と云っても僕は本格的な小説を早く書きたいです。トルストイやドストエフスキーに肉迫したいとつくづく思います。」というような、空元氣、誇大な大言壮語癖がまだまだままとわりついていたことを示す言辞が見られるわけでもうしばらく時間が必要だったようである。

5の書簡は勤務する旧制今宮中学が昭和22年春の選抜甲子園大会（全日本中等学校野球大会）に出場が決まり、氏は野球部長をしていたために小説どころではなかった（ちなみに結果は一回戦で名門桐生中学に敗れた）がそれがすんで、「陽春米」とあるので、この書簡は昭和22年4月上旬頃のものだと推定される。また、4月1日からは新制高校の発足に伴い、今宮高校から大阪市立南高校に転勤し

ている（「私の履歴書」）。

次の6の書簡までは二年半近く間があくのでこの間の動静を簡単に辿っておくと、昭和21年1月に父の勧めで浜生千寿子と見合結婚し、翌年十月には長女夏子が誕生、21年6月には長い軍隊生活の後には漸くやせ細った次兄英二が復員と慶事が続くも、22年三月に英二は捕虜虐待の戦犯容疑で巣鴨プリズンに拘留され、当時虐待のカドで検挙された者は殆どが死刑にされたため、彼は生命の危機にさらされ、そのあとには死や不幸が続け様に起こる。（幸いなことに英二はそれから二カ月後に釈放された。理由は告げられないので不詳だが、父の奔走で旧知の作家・佐藤春夫に連合軍最高司令官マッカーサー宛に助命嘆願書を書いてもらったのが、或いは無事釈放の因となっているのかもしれない）。23年11月には長兄鷗一が37歳の若さで妻子を残して病死し、その一カ月後の12月25日朝には、夫と教え子との恋愛問題に苦しんだ庄野夫人が自殺を凶って生死の境をさまよひ、狼狽した父からは「この家から」と向こうの部屋にいる父が云った。「二度も続いて葬式が出るか」母もそこにいた。ついひと月前にいったいの菊の花に埋もれるようにして、座敷に棺が置かれてあった。その中に死ぬ間際まで苦しんで亡くなった長兄が横たわっていた。「どう云ってみんなに話せるか、あれだけ大勢の人に来て貰って、迷惑をかけておいて、また葬式ですとわしの口から云えるか」（「蒼天」）と激しく叱責された（幸いなことに葉が僅かに致死量に足りなかったために死を免れた。後に「舞踏」「静物」など一系の作品に描かれる事件である）。その父も昭和25年10月には急逝。

一方、文学上の歩みはどうであったかと言えば、24年までは藤沢

桓夫の新人作家育成雑誌とも言うべき「文学雑誌」を主に修業を進めたが、「ビュームと黒猫」（昭22・5・25「文学雑誌」）、「兄弟」（昭24・4「同上」）、「十月の葉」（昭24・7・8合併号「同上」）などの作品があるが、いずれも掌編、あるいは小品で、シャレた気のきいた作品ではあっても、強さ、鋭さ、あるいは一篇の重量に欠ける憾みは否定できない。

#### 「愛撫」

そういう中で文句なしに秀作であるのは「愛撫」（昭24・7・8月合併号「新文学」）である。この作品を発表するきっかけをつくってくれたのは九大時代の一級先輩で、共に作家志望、しかも住居も大阪と神戸というふうになかった島尾敏雄で、彼はその頃第一創作集『単独旅行者』（昭23・10・30 真善美社）によって世に認められ、彼の推挽によって「新文学」に掲載された。更にこの作品には運も付いていたようで、児童文学志望の兄の英二が戦時中ジャワの陸軍にいた時、報道班員としてジャワに来た中山義秀と知り合い、その人柄に惚れこんでいて、あの文学者魂を学べと勧めるので、「新文学」に掲載の「愛撫」を鎌倉に住む中山に送ると思いがけず「うんと褒めた」葉書をくれたうえに、「群像」（昭24・7）の「創作合評」（評者は青野季吉・中山義秀・荒正人）の対象作品としてとりあげるようにはからってくれた上、創作合評の席上では孤軍奮闘の恰好で「愛撫」を支持してくれ、氏の文壇登場のきっかけとなったのは幸運であった。「群像」からはじめて小説の注文が来たのはそれから間もなくの事でそれが文壇デビュー作となった「舞踏」（昭25・2「群像」）であった。

「愛撫」は結婚して三年経った、まだ子供のいない若い人妻ひろ  
こが、丁度憑きものが落ちたように夫の才能に疑惑を持ち、結婚に  
失望し、人生の空虚さに目醒めてゆく過程を恰も細密画のそのよ  
うに丹念精緻に描いたもので、端的に言ってそれは結婚と人生への  
〈幻滅〉を主題としている。

但し、付け加えておかなければならないのは、この作品では〈幻  
滅〉の主題をシリアスなものとしてではなく、醒めた目でユーモラ  
スに提示していることである。深刻悲壮な装いではなく、ユーモラ  
スなトーンの中に〈幻滅〉の憂苦を溶解させている。

あの人が笑えば笑い、あの人が不機嫌になれば悲しみ、あの人  
が目の前にいると物が言えなくなり、あの人が出掛けてしまうと  
呆けたようになってしまうのであった。あたしの世界というのは  
あの人のので、つまりあの人の外にはあたしは何も見ることが聞  
くことも出来ない状態であった。何と云う哀れなみすぼらしい状  
態であったのだろう。(中略)そして、三年経った今でも、そう  
いう哀れなあたしは、まだすっかり消えてしまっただけではないよう  
な気がする。(「愛撫」)

結婚することによって男女が失うものはいろいろあるであろう。  
しかし、問題を限定して女が失う最大のものは何であろうか、と設  
問してみた場合に、右の一節は最も正確にそれに答えているであろ  
う。結婚することによって女が失う最大のものとは自分自身なのであ  
る。結婚によって自分を夫に奪われてしまい、夫に自分を見失って  
しまったひろこが、痛切に嘆くのはそのことである。自己喪失とい

う言葉にすればありふれたことだが、しかし我々の生存の根源につ  
ながる問題が一つ結婚にかかわって存在することは確かである。

そしてそのあとに一連の夫婦小説―「舞踏」(昭25・2「群  
像」)、「スラブの子守唄」(昭25・8「群像」)、「メリイ・ゴオ・ラ  
ウンド」(昭25・10「人間」)―が続くことになるが、それについて  
は曾て拙稿「庄野潤三論(一)―出発前後」(昭55・9「言語と  
文芸」90号)で詳述したので参照願えれば幸甚である。

## V I K I N G

庄野氏がヴァイキングの同人になったのは同人名簿によれば9号  
(昭和24・8・25刊)から25号(昭和26・1・1刊)までで、創刊  
号からの同人島尾敏雄からの勧めであった。6の書簡の半月程前の  
入会ということになる。

ヴァイキングへの入会期間は見られて明らかのように、一年半に  
満たない短い期間であったが、しかしそれに反比例して氏が自らの  
文学観、文学の方向、そのありかたを見定める上で極めて大きな役  
割を果たしたのが、ヴァイキング号のキャプテンであった富士正晴  
であるわけで、決して無視できない重要性をもつにかかわらず、今  
日そうした指摘は殆どなされることがないのみならず、氏自身ヴァ  
イキングや富士に関することは年譜や回想からもカットしてふれ  
ず、我関せず焉、あるいは風馬牛の態度をとろうとしているよう  
である\*。

前項の11の注を見てほしいのだが、ここで先ず第一に注目される  
のは後に出世作となった「舞踏」(昭25・2「群像」)が「数日  
中」に刊行されるということであり、四大文芸誌に初めての発表と

いうこともあつて流石に喜びを隠しきれず「批評」を請うている。

### 前田純敬

もう一つはライバルであつた前田純敬(大11・3・9〜平16・2・10)の動向への関心で、「夏草」(昭24・12「群像」)の評価を問うている。

前田は今でこそ消えてしまった作家であるが、この前後から昭和30年頃までは毀誉褒貶はあるが新進作家として活躍し、殊に「夏草」は昭和24年下半年の芥川賞候補となり、井上靖の「闘牛」と争つて賞を逸した。ちなみに福田恒存は「夏草」が発表された翌月の「改造文芸」の文芸時評で、「僕の目にふれたかぎり、望みを囁しうる新人は『群像』に『夏草』を書いた前田純敬のみ。」と書いた。

続いて「背後の目」(昭25・4「群像」)、「檻」(昭25・6「文学界」)などを発表、新進作家として注目されるが、その頃、詳しい経緯は不明だが、彼が「文芸春秋社に乗り込み、大気炎を上げて総スカンを食いシャットアウトされ」ることなどがあつて孤立を深め、昭和30年以後は殆ど筆を断つた。

つまり、前田純敬は年令は庄野氏より一歳下だが、文壇的には明らかに一歩先を行く前者者であり、その動向には無関心ではいられなかつたことを示しているであろう。ついでに後の方の書簡からもいくつか拾つておくと、27で前田の「檻」(昭25・6「文学界」)は「少し変わつていて、感心して読みました。力がグッとこのびて来ているのを感じます。」と言ひ、35では「(8月)二十三日夜行で上京、昨三十日朝帰阪しました。純敬、林、真鍋と会いました。「虹と鎖」(百十六枚)を純敬は支持しました。(中略)純敬は「人間」

に五十枚ばかりのを渡してある由。その前に「群像」に五〇枚くらいのを渡してある由。福田恒存・中村光夫とヴァイキングについて語つた由」とライバルの情報もぬかりなく集めている。

### V I K I N G の レーゾン・デートル

さて、庄野氏はヴァイキングに入会して同人となつてから一年半もたないうちに退会しているのだが、氏にとつてヴァイキングとは一体何であつたのだろうか。そこに氏は何を期待し、何を得たのか。あるいは何も得られないものはなかつたのか、どうか。ここではこの期の最も大きなテーマについて二人の往復書簡に即して少し考えてみたい。

氏がよりどころとした同人誌としてはすでに紹介した「光耀」のほかには「文学雑誌」(昭和21・12〜55・6)があり、編集人として藤沢桓夫や長沖一らがいて、井上靖や庄野潤三・沢野久雄らを輩出して戦後関西の文芸雑誌としては重視されていたといつてよいであろう。

ところで両紙に発表した作品を比較して示すと次のようになる。

| 年 月   | 「文学雑誌」      |
|-------|-------------|
| 昭22・1 | チエルニのうた(詩)  |
| ・5    | ピューマと黒猫(小説) |
| 23・4  | 銀鞍白馬(小説)    |
| 24・1  | 暗い屋上(詩)     |
| 3     | 冬の夜の星(詩)    |
| 4     | 兄弟(小説)      |

7、8合併 十月の葉(小説)  
7、8合併 文学の行方(座談会)

年 月 「V I K I N G」  
昭24・9・25 サロイアンのこと

10・25 サロイアンのこと(2)  
25・1・1 今村二郎の話(詩)  
6・1 分別(小説)

これを見る限り、質・量共に「文学雑誌」の方にウェイトがかかっていて、これでは何の為にわざわざ活字の「文学雑誌」と決別して、ガリ版の同人雑誌に入ってきたのか意味がわからないことになろう。

つまり前の同人雑誌とはきっぱり縁を切ったのはいさぎよい態度だが、しかしこの仕事ぶりにはいささか首をかしげざるをえないであろう。

それでは「同人雑誌」ではなく他誌・紙への発表状況についてみてみると次のようになる。

年 月 作 品  
昭24・3、4合併 愛撫(小説・新文学)  
25・2 舞踏(小説・群像)  
5・6 抑制について(随筆)「夕刊新大阪」  
6・15 愛情に満ちた歴史眼を―作家の理想「同志社学生新聞」

7・1 君が人生の時―人生肯定の作家・サロウヤン  
「夕刊新大阪」  
8 スラブの子守唄(小説・群像)  
10 メリイ・ゴオ・ラウンド(小説・人間)

九大時代からの盟友島尾敏雄がいち早く戦後の文壇に認められ、その推薦によって発表されたのが「愛撫」で、発表誌の「新文学」は元は地方誌だが、戦後の復刊後は文芸誌として一流の評価を受けていた雑誌で、これが好評だったところから初めて中央の文芸誌である「群像」から小説の注文が来て「舞踏」となり、「スラブの子守唄」「メリイ・ゴオ・ラウンド」と続き、12月例会での同人辞退、39の書簡での正式な辞退となる。

この一連の流れを見ると、「愛撫」以後の氏はもはや「同人雑誌」の作家ではないわけで(その事は「舞踏」以下の作品の出来映えにも明らかであろう)、従って「ヴァイキング」には何度も書く、書きたいと言いながら、雑文と掌編小説でお茶を濁す結果になったのであろう。

とすれば、将来中央の文壇で仕事をし、活躍しようとする時、焼野原の東京では住む家もなくはどうもならんと見るや手廻しよく東京練馬の石神井公園に九〇坪の土地を手に入れ、転勤直前の昭和28年8月には三間の家が完成しているという用意周到さ、あるいは遠交近攻の策もあながち驚くべきことではないのかもしれない。

当然のことながらその場合、地方の小さな同人誌の動向などは結果として右に見たように放置されたわけで、氏にとってはこの時期の最大の急務は何よりも自己の特徴を明確に認識して把握し、いち

早く方向を定め、個性鮮やかな作品を創造することであつた筈だ。従つてその為の俄勉強の言辭が書簡には頻出する。

「今度、大阪へ来られる時、アメリカの小説、小生のためになりそうなもの何でもよろしいから、何冊でも、お貸し下さいませんか。お願いします。アメリカの小説で、これを読め、と云う風にお教え下さい。」(15)の書簡。以下番号のみ記す。「ストレイチーというのは、どういう人か、知りません。僕もなんだか、そうするのが(歴史の個人伝をたくさん読むこと) 自分にいいような気がしません。(あなたに云われてみて) どうか本の名前を教えてください。そしてもしお持ちでしたら、どうか御貸して下さい。」(17)。19、20では「スラブの子守唄」についてふれ、「今夜でれいの小説かきあげます。それで、もしお閑でしたら、是非遊びに来られませんか。二七日頃いかがですか。僕の小説、よんで意見を聞かせてほしいです。たのみます」(20)。『愛撫』『十月の葉』『舞踏』『スラブの子守唄』の四つから庄野潤三論を書いて下さい」(31)。「一度貴兄に僕のこれまでのもの、『雪・ほたる』(驚注―これに31の四作を加えた)の五つの小説と、今度書き上げた新作『虹と鎖』とを併せ読んでもらつて、僕の向うべき方向に対してサジェスチョンを与えてほしいと思います。」(33)。「数日中に『虹と鎖』を除く小生の全作品(片片たる習作をも入れて)を大兄のもとに持参したいと存じます。どうか僕の向うべきところをご指示下さい。」(35)。「庄野潤三論は大変に期待しています」(38)。

右の引用からもその一斑は窺えるように、富士は庄野氏にとって気軽に甘えられ、よりかかられる兄貴分のような存在であり、殊に文学については和漢洋にわたつて該博な知識をもち、特に新人の特

質を見抜いてこれを評価する才能には卓越したものがあり、多くのすぐれた才能を発掘した。ここで氏が富士に期待しているものもそれにほかならなかつた。

それ故にすぐれた水先案内人としての富士の才能に人一倍強く期待しているだけに、彼がいかに庄野作品を分析し、その本質を明らかにし、その文学世界のありようを如何にさし示してくれるか、恥も外聞もなく文学青年の如くしつこく庄野論を強請した所以はそこにあつたと見られる。

それだけに後年、これほどまでに恥も外聞もなく、向うべき方向の示唆を乞い、資質の分析を依頼し、読む本まで懇願していた事実が巷間に知れることになるのは余り体裁のよいことではないにちがいない。それ故、氏は前記のようにV I K I N Gとのかかわりについては殊更無関係であり、富士正晴の名は一切自筆年譜には登場させないという態度をとり続けているものと断じてよいのではあるまいか。

一方、懇請された富士の方もまた意気に感じるころがあつたやうで意欲的に稿にとりかかったが、結果的に稿は成らなかつた。そうなると自らの資質の促す方向がつかめていないだけに試行錯誤の低迷期に陥らざるをえなかつた。

加えてこの時期庄野氏には厄介な問題が次々に押し寄せてきて悩ませていた。一つは25年10月9日の父急逝である。父の貞一は一代で帝塚山学院を幼稚園から小学校・中学校・高等学校・短期大学(没後四年制大学も出来る)まで擁する関西私学の一代学園にまで造りあげ、また初代の大阪府公選の教育委員として活躍中であつたが狭心症で突如倒れ、長兄鷗一が跡をつぐ予定であつたが、思いが

けず心臓喘息のため37歳の若さで没し、まだ二年も経っていないかった。次兄の英二は十年に及ぶ長い軍隊生活とその間のマラリアや負傷や飢餓の後遺症に苦しんでいた。三男の潤三は漸く教員生活にアキが来て学校の宿直の夜にP・T・Aの役員が来て「受験準備をもっとヤレと抜かしおって腹が立ちました。教師はイヤだイヤだ」(22)ともらし、転職を本気で考えはじめていたが、母からは「家族を飢え死にさせるつもりか」ときびしく反対されているというところがあって内憂外憂(こもこも)も来ってデッド・エンドの状態にあった。それが意外な事情から氏の転職は全く予想外の展開を見せ、ラジオの民間放送が開始されるに伴って氏は昭和26年9月11日朝日放送に入社して教養番組の制作を担当することになる。この環境の激変が25年10月から約二年間の執筆活動の休止をもたらした。28年9月から朝日放送東京支社に転勤すると一転してヒマになり、旺盛な執筆活動を開始すると共に吉行淳之介・安岡章太郎ら同世代の作家との交流や畏敬する文学者や評論家との接触は新しい刺激と新しい世界との交際を開いて氏の文学に豊饒な実りをもたらしてくれるのである。

### 精神的種族

かつて私は「庄野潤三論(二)——出発前後——」(昭55・9・25「言語と文芸」90号 大塚国語国文学会(のち、おうふう))を書いた時、末尾に近い部分に次のように記したことがある。少し長くなるが引用しておきたい。

「メリイ・ゴオ・ラウンド」(昭25・10「人間」。以下「メリ

イ」と略称)は共に人生に適應できない夫婦を描いているが、特に妻のなつめは結婚して五年、四歳の子をもつ二十五歳の母親であるが、彼女は人生に慣れられず、慣れることを拒んでいる。

彼女は「生活と云うものは、感激的なものではない」「辛抱すると云うことが、生きることだ」「朝が来たと思つたら、もうすぐ夜になってしまふ」無為とアンニユイの現実に対して「ノン」と言い、平凡で単調で日常茶飯の繰返しである現実を拒否しつづけるのである。(中略)

「メリイ」の妻、なつめが病んでいるのは明らかに Bovarysme であり、近代人の不幸にほかならないが、俗智はこれに関わらず通りすぎることをよしとする。人はそれに関わつては生きて行けないからである。

つまり、この問題は生にとって最も根源的であり、本質的であると同時に現実の生活においては逆に最も迂遠なものであることもまた確かなので、これに関わつて苦闘した近代の文学者が存することは贅言するまでもない。

そういう一群の文学者についての私見の見取図を日本の近代文学に即して図式的に示せば鷗外はそれを歴史・史伝の世界に追及し、華麗多彩な仮構の世界に追尋したのが芥川であり、中島敦は中国の古代を主とする歴史の世界へ飛翔したと考えられ、このようなパースペクティブの中に九州大学東洋史学科出身の庄野氏を置いてみると、氏はこれらの作家達と極めて近い精神的種族に属し、大胆に割り切つてしまえば、鷗外が歴史・史伝の世界で追及したところを現代の生活で試みているのが庄野氏の世界なのではないのかというのが私のひそかな目論見・見当であり、同時



に氏への私の関心も大根はその点にある。(p156~157)

拙稿の要点は一言で言えば庄野氏の仕事は「現代における鷗外の試み」であり、もつと約めて言えば「現代の鷗外」と言ってよいのではないかというものであった。

ところで17の書簡にリットン・ストレイチーの名があるように、この前後氏は自らの資質・教養の拡大強化をはかって歴史物に特に集中していたようで、ストレイチーの他に日本の作家では鷗外に傾倒したようでしきりに言及しているので、二、三引いてみたい。

「鷗外」の『渋江抽斎』をよみ、うなずくところあり。何ぞ読むことの遅かりし。(中略)「渋江抽斎」の夫人五百は実に躍如としていますね。僕もあんな、しつかりしたものを書きたい(42)

「鷗外の短篇には面白いものがありますね。しかし、僕は現代の渋江抽斎が書いて見たいです。その主人公を探索しています。」

(43)「今度のは百一〇枚のもので、初めて他人のことだけ書きました。個人の歴史を書くつもりで、わざと荒っぽく、スピードを考えて書いてみました。」(33)

「鷗外の『栗山大膳』『細木香以』など面白いですね。『虹と鎖』の続きを書く準備をしています。春休みに入ったら書くつもりです。」(44)

かねてより私は庄野氏と鷗外の史伝あるいは歴史小説とは密接な関わりがあるのではないかと考え、それを端的に前掲稿においては「現代における鷗外の試み」と評したのに対して、庄野氏自身これらの書簡で鷗外臆を語ったうえで更にその真似ではなくて、「僕は、現代の渋江抽斎が書いて見たいです。」ときっぱり断言し

てくれているのに出会ったことは望外の喜びである。

それは私一個の個人的な名譽というような瑣末なことではなくて、氏の文学の本質に関わることだからである。

以上長々と書き綴ってきたが、この他の件については注の説明で事足りると思われるのでこのへんでペンをおくことにしたい。

#### 注

1 講談社版庄野潤三全集第十卷所収の「自筆年譜」がこれまでの年譜類では最も詳細であるが、これをはじめとして既刊の年譜にはヴァイキングや富士に関する記述は一切ない。もう一つ付け加えると、私は本書簡の不詳の部分について庄野氏に問合せの許可をお願いしたのであるが、「メジロの来る庭」(『文学界』連載中につき多忙)を理由に03・4・12付書簡でことわられている。

2 山田稔「前田純敬、後始末」(平20・3・31「C A B I N」10号)、同「前田純敬、声のお便り」(平19・3・31「同上」9号)の二つの論考が作家と人間前田の両面に鋭くメスをふるって秀逸であり、調査もまた周到である。文春の事件は阿川弘之からの聞書として伝聞。

3 『文学交友録』95・3・30 新潮社